

# ホーム・カマーズ

ながれ

十文字 修 (じゅうもんじ おさむ/佐渡島在住)

旅と放浪のちがいは何だと思えますか？  
…。これは、高倉健最後の主演映画の中で語られる言葉である。答えは「旅には目的があり、そして帰る場所がある」。

この三十年間で世界は、とりわけ私たち日本人は、道行きの目標地点をすっかり見失ってしまった。かといって振り返ると、帰る場所もまた喪われている。

そこでなお、希望を見出すとすれば何か。それは、そうした放浪の途上で行き暮れている己の姿に、気づきつつあるということだ。ながい年月を帰依してきた神は、実はニセものではないか、と目を覚まし始めたということだ。多くの人びとはまだ何となく薄々と、少ない人びとは明らかな自覚をもって。

## ●個人史のいくつか

三十年前といえば、1993年に私は結婚した。その二年前に地方公務員を辞し、市民活動の支援センタースタッフやまちづくりコンサルの臨時雇いなどをしつつ、地元の横浜で谷戸を生かした公園づくりや川の再生の運動に取り組んでいた。仲間たちと作り上げた公園がオープンして一週間後、その公園で、集まってくれた人たちを前に結婚の誓いを読み上げた。33才の時である。

そのまま環境活動家？としてキャリアを重ねたり、一念発起して研究者をめざす途もあり得たが、その発想はなかった。行政との協議も経て公園の運営体制が形をなし、その後の持続が見通せた時点で、妻と幼い子どもたち三人とともに、私は新潟県の佐渡島に移り住んだ。食い扶持の当てがあったわけではない。最初のアルバイトは土方仕事である。

なぜ移住したのか。実はいずれ横浜をはなれ地方に移るとするのは、結婚時の相手との約束でもあった。その約束の、私の側の心境をかいつまんで言えば、「このままではいずれ行き詰まるとの予感」である。世の中も世界も、ひいては自分も。

その後、予感は確信に代わったが、ただ移住当時は、切羽詰まった危機感はなかった。これまでの経験に加え、さらに未知の土地に身を置くことで、個人として社会として進むべき方向を見出す。その手がかりを得たいというやる気に満ちての再出発だった。2002年、42才の時。

## ●たどらなかった道

前述の「行き詰まりの予感」は、当時、私と同世代の者が、多数派ではないがひとつの傾向として持つ、経済成長一辺倒への疑問からきていた。それは子どもの頃からの連日の公害報道、中学時代のオイルショック、大学を出てすぐのチェルノブイリ事故といった一連の出来事を背景にした、1970年代から80年代の世界的思潮とも連動する。

その頃、エコロジー運動は「地域」をキーワードとして掲げ、生態系の能力に依拠した小規模循環型の社会を提案し、多くの同時代の人たちの心を掴んだ。その頃の象徴的な著作をひとつ選ぶなら、シューマッハー著『スモール・イズ・ビューティフル』だろう。

そんな時代の空気が変わり出した転換点は、1989年の冷戦終結だったように思う。唯一の超大国となったアメリカ発のグローバル資本主義が、世界中を一気に席捲し、ITの発達、新興国の経済的台頭とあいまって、「有

限」の自覚の中で生きようとした人びとを、ふたたび「無限」の成長幻想に引きずり戻した。

同時並行で、環境問題のキーワードは「地球」に移った。それは間違いではないが、身近な地域を大切に自治し、身の丈に合った暮らしを築くというキメ細かい豊かさの思想は、少し様相を変えたように思う。こうした前史によって、今ここに至る三十年は用意された。

### ●佐渡での21年目

佐渡の風景が変わらず私は好きである。山はただ山として在り、川はただ流れている。こういう場所なら、人もただ人として生きられそう。

たまに故郷の横浜郊外に帰ると愕然とする。連綿と果てのない巨大な一個の人工物に見える。何処に視線を落としても営利の気配に満ちている。お金を得るためか、お金を使った結果か、そのどちらかで出来た風景がどこまでも続くように見える。

ただし言い添えれば、横浜市は1970年代から今日まで、施策として都市農業に力を入れてきた。370万人都市にあって野菜の自給率は約18%を占める。その担い手の農家にせよ自治体職員にせよ、その動機は決して経済効果のみで覆われてはいない。そこには、人間が暮らすに足る都市を持ちこたえようとする矜持がある。私は帰省のたびに彼ら彼女ら古い友人たちとひととき過ごし、気持ちを立て直して佐渡にもどる。

その佐渡は移住後21年で、島民は7万人台から4万人台に減った。戦後すぐのピーク12万人から一貫して減り続けている。高齢化率は40%をこえた。一体この国の地方、津々浦々にとって、経済成長とは何だったのか。答えはあきらかである。今この島で起こっている事態は日本中で起こっている事態であり、いまさら羅列して描くまでもない。その現実の中で、私はともかく生計を維持してきた。その果てに、ようやく方向が視えてきた

気がする。

初心に返るということだ。自分や家族、親しい人に本当に必要なコトやモノを自分たちの手で確保する。という大前提を取り戻すことだ。失ってきたながい年月をこえて。たしかに温暖化の脅威には背中を押される。でもそれとは別に、この世での限られた生の満たされ方を想うと、自然に支えられ、五感と全身をあまねく使い、真面目な人たちと一緒にいたりたい。そういう者にとって、この島の山と海、農地は十分に豊かである。善き世界や地球は、私たちのそのような選択の結果としてのみ、有り得る。

ところで余談だが、「真面目」と「かたい」は似て非なる、というより実は正反対ではないか。失礼ながら、後者は同じ道に行くには縁なき衆生であって、まこと度し難い。

### ●クジラが海に戻ったように

この秋に初めて播いた大麦は、一週間後に一斉に芽吹いた。雪がくる前に麦踏大会をしようか。かつて盛んだった佐渡の麦づくりは現在、わずかである。しかし生育期に夏を含まず、降雨より乾燥を好む麦作は、米作との二本立てを再建することでリスク分散になると思いついた。温暖化時代を生き延びるための思案は、シロウト考えも総動員である。誰でも当事者であって創意工夫を伴うから、不謹慎ながら正直なところ面白くもある。カーボンニュートラルな薪利用を増やすべく、萌芽更新力の旺盛なクヌギの苗づくりも始めた。

佐渡には次々と若者が移り住んできている。彼ら彼女らも、まだ彷徨の途中だろう。先に挙げた『スモール・イズ・ビューティフル』の題名を、著者は最初「ホーム・カマーズ」としたかったとのこと。ふるさと帰還者である。

例えばクジラが海に戻ったように、進む道が帰り道に重なることもある。近代という経験を積んだゆえの帰還、ぜひ一緒に。